



TITLE:

傳統派の社會連帶思想

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

CITATION:

米田, 庄太郎. 傳統派の社會連帶思想. 經濟論叢 1922, 15(4): 479-504

ISSUE DATE:

1922-10-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127954>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京 叢論濟經

號四第 卷五十第

行發日一月十年一十正大

論叢

傳統派の社會連帶思想

文學博士 米田庄太郎

時機尙早なる社會革命の企

法學博士 河上肇

階級に就いて

文學博士 高田保馬

經濟と自由

經濟學士 堀經夫

時論

物價調節問題

法學博士 河田嗣郎

營業稅論

法學博士 小川郷太郎

說苑

租稅負擔の地方別研究

法學士 汐見三郎

雜錄

一九二一年英領印度勞働爭議

法學士 柴田規矩三

小賣相場と卸賣相場

法學士 汐見三郎

經濟論叢

第十五卷 第四號 (通卷第八十八號)

大正十一年十月發行

論叢

傳統派の社會連帶思想

米田庄太郎

(一) 連帶主義の淵源に就て

夫れ佛國に於て社會連帶の思想が特定の意義に解せられ、連帶主義(La Solidarisme)として盛んに唱道されて來たのは千八百九十年代からである。殊に佛國現代の一大政治家レオン、ブールヂョア(Léon Bourgeois)氏が、連帶思想に關する論文を、千八百九十六年「新評論」(La Nouvelle Revue)に於て公にし、且つ翌年之を一冊の書物(La Solidarité. 1897)として刊行されて以來、社會連帶思想は非常なる勢を以て、佛國の政治的社會的倫理的思想上に擴まり、又教育家は之れに基いて、新時代の新教育の根本方針を確立せんとするに至つた。而して現世紀に入りてより、

宛も第三共和政府の官學說、官許哲學 (la philosophie officielle) となりつくあるとまで云はれたのである。

今ブールヂョア氏によりて、連帶主義として唱へ出されたるが如き形態に於ては、連帶思想は確に一の新しき社會思想と見做し得られる。夫れは科學的方法と倫理的理想とを結合して、宗教や形而上學を離れた新しき立場をとり、現代に相應しき社會的政治的倫理の方針を確立せんとする精神からして、相背反する自由主義と社會主義との上に立ち、兩者に含まる、眞理を適當に調和せんとするものである。而して其の點に於ては、大體上獨逸の社會政策主義と一致して居る。

併し又一定の特有の傾向を具へ、夫れによりて一の根本的特徴を發揮して居る。夫れは即ち國家に關する思想である。獨逸の國家社會主義者は云ふまでもなく、其他の社會政策主義も一般に國家の獨立的存在を認め、或は其の獨立の權力を認めるが、佛國の連帶主義者は國家の獨立存在も獨立權力も認めない。ブールヂョア氏は左の如く述べて居る。

自然的連帶の法則の認識は、抽象的及び先天的なる孤立人の概念を破壊することに於て、同時に又同様に抽象的及び先天的なる國家の概念、即ち特別なる權利主體として、或は人間の服従する一の優越なる權力として、人間から孤立し、或は之れに對抗するものとしての國家の概念を破壊する。

國家は人間の造れるものの一である。されば人間に對する國家の優越權なるものは存在し得ない。權利の主體となり得る、自然的及び充實的な意味での實在物の存在しない處には、權利は存在しない。經濟學者が箇人的自由の名に於て、社會主義的國家概念を排斥する時には、彼等は正當である。

啻に人間團體の政治的形態たる國家のみならず、社會即ち人間團體其物も之を構成する個人の外にありて、現實なる存在を有し、個人の權利に反對する、特殊な優越權利の主體となり得る孤立的實在物でないのである。されば權利義務の問題の起るのは、人間と國家或は社會との間の關係に於てではなく、人間相互の間の關係に於てである。但し夫れは共同の仕事の爲めに團結し、共同目的の必要によりて相互に義務を有するものとして考へられたる人間、相互の間の關係に於てである。(La Solidarité, pp. 87-89)

右の國家概念及び權利義務の概念は、佛國の連帶主義を獨逸の國家社會主義や社會政策主義に比して考察するに當つて、先づ吾人の目に映する兩者の著しき差異である。而して此の方面に於ては、連帶主義は「革命」の哲學、第十八世紀の極端なる個人主義哲學に對する反動ではなくして、ブールジョア氏自から云はれて居る如く、「思想の歷史上第十八世紀の哲學の發達である。」(La Solidarité, p. 156)又同氏は決して「革命」の傳統的根本思想を破壊せんとするのではなく、固く

之を保持し、遵奉して、而して第十九世紀に於ける社會の新しき發達に順應する様、之を發達させんとするのである。此の精神に於ても亦佛國の連帶主義は、獨逸の國家社會主義と異なつて居るのである。

却說連帶主義は「思想の歴史上第十八世紀の哲學の發達として 又佛蘭西革命が自由、平等及び同胞と云ふ三つの抽象的言葉の下で、世に第一の公式を與へたる政治的及び社會的理論の完成として」、ブールジョア氏によりて唱へ出されたものであるが、今其の「發達」と云はれ、其の「完成」と稱せられたる意味を詳しく吟味して見ると、連帶主義は其の哲學的科學的及び倫理學的或は法理學的基礎に於て、又其の實際的主義に於て、第十八世紀或は「革命」の思想の理論的基礎や、其の實際的主張と大に異なつて居る。而して其の差異は、單に第十八世紀或は「革命」の根本思想の自然的發達として解釋し得られるものでなく、第十九世紀に於て新に發達せる反對思想の影響によりて、根本的に修正或は改造を加へられたるものと云ふ意味にての發達として、解釋される可きものであると思ふ。

今第十九世紀に於て發達せる科學の新しき結果や、新しき思想は、總て第十八世紀の個人主義、自由主義に反對するものでない。第十九世紀間の社會思想の發達に、殊に重大なる影響を及ぼしたる生物學は、其の生存競争及び自然淘汰の理論に於て、大に自由主義、個人主義の理論的基礎を

固め、其の實際的主張を強めたのである。自由主義者は生物學の生存競争及び自然淘汰の理論によりて、始めて確實なる科學的基礎を與へられたと確信して、益々其の主張を強めたのである。

而して實際に於ては、第十九世紀の社會的發達は、第十八世紀の連續として、自由主義的個人主義の方針に於ける發達であると云ふことが出来るのである。

併し生物學は一方に於ては、或は先づ、生存競争及び自然淘汰によりて生物進化の理を明らかにすると共に、他方に於ては、或は夫れに次で、有機體内の諸部分の分業的連帶や同種生物間の相互扶助によりて生物進化の理を明らかにした。而して之れに基いて又個人主義、自由主義に反對する社會思想が唱へられて來たのである。尙ほ佛國革命が豫期されしが如き満足な政治的社會的改造を齎らさなかつた事實や、自由主義が經濟生活に於て齎らせる利益と共に、其の弊害の益々増加する事實は、自から自由主義、個人主義に反對する社會思想を生み出さざるを得なかつたので、實際に於て之れに反對する種々なる社會思想が、續々として現はれて來たのである。而して連帶主義は右の形勢の下で、自から現はれて來た處の、相反對する傾向を調和せんとする新しき企圖の一であるのである。

されば連帶主義の淵源を詳しく究明するには、吾人は一方に於ては第十九世紀に於ける自由主義、個人主義の發達を研究し、他方に於ては同世紀に於ける之れと反對の社會思想の發達を研究

し、更に同世紀に於ける生物學の發達と夫れが社會思想に及ぼせる影響、殊に社會學の發達を研究せねばならないのである。然るに此處に注意す可きは、佛國に於ては第十八世紀の自由主義に反對する社會思想として、或は之を矯正せんとする社會思想として、社會連帶 (La Solidarité Sociale) の思想が、連帶主義の現はれるに先だちて、既に種々なる方面より發達して居たことである。而して吾人は此の社會連帶思想の發達を研究することによりて、以て連帶主義の淵源を究明することが出来ると思ふ。要するに佛國大革命後間もなく現はれ始めたる、社會連帶思想の發達を究明することによりて、吾人は連帶主義の淵源と認む可きものが、明らかに究め得られると信ずるのである。換言すれば、連帶主義は佛國大革命後間もなく現はれ始めたる社會連帶思想の特殊な發達をなせるものと見て、其の真相も亦歴史的淵源も、明らかに理解されるのである。余は始めは單に連帶主義の淵源を明かにするだけの主旨にて社會連帶思想の發達を研究しかけたのであるが、段々研究して行く中に、此の思想は革命後に於ける佛國の思想界の總ての方面に、重大なる意義を有するものなるを覺り、始めの主旨を越へて、社會連帶思想其物の發達を研究することを主眼とし、而して連帶主義は只其の輓近の發達の一方面に過ぎないものと見るに至つたのである。尙ほ余は連帶思想を嚴密なる意味に解する時は、夫れは今や發達しつゝあるプロレタリア文化を媒介として、將來に發達す可き完全なる文化の根本的一原理となる可きものと考へて

居るので、この事は「現代文化人の心理」及び其の他の拙著に於て、既に簡單ながら論述して置いた。

余は上に述べし主旨で、佛國に於ける社會連帶思想の發達を研究するに當つて、年代的に先づ注意すべきは傳説派(l'ecole traditionaliste)の社會哲學であると思ふ。それで本論に於ては、同派の社會哲學を研究し、其の中に始めて社會連帶思想は如何なる意味にて現はれてゐるか、又同派内に於ける社會連帶思想の發達が、結局同派の社會哲學を如何なる方針に導いたかを考究することとするが、尙は夫れに先だち連帶主義の始源の研究に就て、二三の説を簡單に論評して置く。

マビロー氏は「哲學に於ける社會的連帶」を論究するに當つて、倫理的連帶主義の始源を古代のストイク派及びエピキュラス派の著作の中に發見せんとして居る。(Mabilleau, L' idée de Solidarité Sociale dan la philosophie. Congrès international de l'Education Sociale. 1901) 而して氏の解するが如き意味では、吾人は更に夫れよりも以前に遡ることが出來やうと思ふ。併し近頃の思想界に於て解されるが如き意味にて、其の歴史的始源を研究するに當ては、吾人はさほど遠く遡る必要はないと思ふ。ゾーヴ氏は現代連帶主義の特徴を、特に其の經濟的であることに認め、之を經濟的連帶主義と稱して居るが、其の始源を研究するに當つて、夫れは第十九世紀以前に上らないと論じ、而して其の先覺者として、カーライル、ラスキン、オーエン及びフーリエの四人を擧

げて居る。(Louis Deuve, *Etude sur le Solidarisme et ses Applications Economiques*, 1905) 現代の連帶主義に於ては、其の經濟的方面は甚だ重大にして、特に經濟的問題の解決に注目することが、其の根本的一特質であるを見る事が出来る。併し連帶思想全體の意義は一層廣大にして、又深いものである。されば同氏も連帶主義の基礎を論究するに當ては、其の法理的經濟的生物學的及び社會學的方面に亘りて考察して居るのである。而して連帶主義が其等の諸方面に於て基礎を有すると云ふことは、又其等の諸方面に於て重大なる意義を有することを指示するものである。尙ほ連帶主義の運動は、其の實際的方面に於ても、決して經濟的問題の解決を圖るだけに止まつて居ない、否な經濟問題の解決の根柢としても或は準備としても、今日の道德思想及び教育思想の改造に力を注いで居るのである。勿論連帶主義を特に其の經濟的方面に就て研究し、特に其の經濟的意義を究明せんとすることは、有益なる研究である。しかも夫れと同時に連帶主義の眞義は、只其の經濟的方面に就て研究するだけでは、充分に理解され得るものでないことを忘れてはならぬ。

ブーグレー氏は連帶主義の起源を指摘するに當つて、先づ其の直接の先覺者としてチード、フイエー、マリオン及びジュールケーム (Gide, Foulée, Marion, Durkheim) 等を挙げ、而してマリオンを通じてルヌヴィエ (Renouvier)、ジュールケームを通じてコント、フイエーを通じてラマルク

及びダーウインやフオン、ペーア及びミルン、エドワーズ等、又デードを通じてフリーリエ及びビエル、ルルー (Fouieret Pierre Leroux) 等を指示して居る。尙ほ又ルイ、ブランやルノーやペツクール等を指示し、終りに基督教の思想と連帶思想の起源との關係を論じて居るが、其の中に左の如く述べて居る。

「第十九世紀は始めから、第十八世紀の極端なる理性が陥らせる危険ある誤謬に對して警告を與へた思想家によりて、まさしく支配されて居た。而して其等の思想家をインスパイアしたのは、基督教の傳説であつた。ヅ、ボナル及び、ツ、メートルは個人主義的傲慢を非難した最初の人々であつた。彼等は社會が本心に立ち歸りて、神の永久的意志の表出たる自然法則（其の力によりて、社會の諸部分は相結合される）を尊重せんことを求めた。オーギュスト、コントは彼の社會學を建設するに於て、彼れ自身の云ふ所によれば、ヅ、メートルの「本質的原理」を自分のものとするより以外の事を爲したであらうか。一層一般的に、或人々は今日の「科學派」（連帶主義派）は神政主義派（傳統派）の主要思想を、多少生物學的な言葉に轉化することに、力を盡くした様に見へると主張し得なかつたか。今傳統派の精神はまさしく此の原罪の概念（夫れは總てを説明し、又夫れなくは吾人は何物をも説明しない）でないか。人々の間に行はれる「此の」恐ろしき罪の遺傳と云ふ、ヅ、メートルの思想を支配し、個人の苦難に於て、人類

の墮落の自然的結果を彼に指示せるは、右の概念である。殊に右の概念は、ヅ、メートルをしてビエル、ルルーに先だち、連帶と云ふ「此の法律の語」の意味を擴張すれば、「功德の轉移性」を表示するに最も適當なるものなるを發見せしめたのである。」(Bouglé, *La Solidarisme*, 1907, pp. 10 et 11.)

ブーグレ氏は右の著作に於ては、連帶主義の起源を詳しく論究せんとするのではなく、只其の主要なる起源或は先覺者と認む可き人々を、指示するだけに止めんとして居るのである。而して其の主旨から見れば、同氏の述ぶる處は大體上誤つて居ないと思ふ。余も同氏の列舉せる人々を以て、連帶主義の先覺者と認める。只余は其等の人々の外に、尙ほ重要視す可き幾多の人々があると考へる點に於て、同氏と見る處を異にするだけである。但し同氏も若し連帶主義の起源を詳しく研究せんとする場合には、恐くは余が同氏の擧げし人々以上に擧ぐる人々を以て、矢張り其の先覺者と認めるに決して躊躇しないであらうと信ずる。而して余は同氏の見解に就て殊に注目す可きは、同氏が連帶主義の起源をヅ、ボナルやヅ、メートルなどの如き傳統派の創設者の思想にまで跡つけて居ることであると思ふ。余は連帶主義の起源或は淵源を研究するに當つては、傳統派まで遡らねばならぬと考へると同時に、又夫れ以上に遡る必要はないと考へるのである。而して此の事は大革命後の佛國思想界の潮流を研究することによりて、明らかに理解されると思ふ。

から、次節に於ては、右の發達を概論して傳統流の占むる地位を明らかにし、且つ連帶思想の最初の發現の一般的意義を示したいと思ふ。

(二) 大革命後の佛國思想界の潮流——傳統派

夫れ千七百八十九年に勃發せる佛國の大革命は、同國にける第十八世紀思想の社會的結果の頂上を示すものである。而して夫れと同時に同國の思想界に於ける一新時代が始まつたのである。云ふまでもなく大革命を成就せる人々の精神を支配せるは、啓蒙時代の同國の思想家、モンテスキュー、ルソー、コンデラク等の人々の思想にして、又大革命後に於ても政府の公認思想と見做す可きは、矢張り同一の思潮であつた。即ち感覺主義及び個人主義、自由主義の思潮であつた。併し間もなく之れに反抗する二種の思潮が現はれて來た。其の一は反動思潮として總括し得られるもの、其の二は進歩思潮として總括し得られるものである。

此處に反動思潮と云ふは、つまり「革命」の政治哲學に反動して起れる傳統派の社會哲學並に「革命」の感覺主義及び唯物主義の哲學に反動して起れる折衷的唯心主義の哲學 (Royce-Collard, Victor Cousin 等の建設せる學派) を意味するものである。而して又進歩思潮と云ふは「革命」の成就せる社會的改造を以て満足せず、人類の社會的政治的組織は更に自由主義的組織以上に進められねばならぬと見る人々の思想を意味するので、一般に其の時代の社會哲學者とか、社會改

思想家が社會主義者とか稱せられる人々 (St Simon, Fourier, Leroux, Proudhon) 等の思想、及び實證主義派 (le École positiviste) の人々の思想を指すのである。

今社會哲學の上から見れば「革命」の思想は個人主義的、資本主義的社會改造を以て、革命の事業は成就されたものと認め、只同一の方針に於て益々社會の發達を導き、又促すを以て、根本的任務と見るもの、即ち自由主義である。而して「革命」の哲學、感覺主義及び唯物主義の哲學に反動して起れる折衷的唯心主義の哲學者も、社會的及び政治的方面に於ては、大體上同一の方針を遵奉する自由主義者であつて、此の方面に於ては何等新しき思想を産出して居ない。然るに傳統派は革命の政治哲學に根本的に反對し、而してカトリック教の社會的原理を基礎として、革命前の社會組織を復興せんとするのである。即ちカトリック主義貴族主義復古主義を奉ずるものである。而して其の點から見れば新しき思想と云ふよりは、古き思想の復活と見る可きものである。しかも傳統派の人々は革命が成就し、舊社會組織を完全に破壊した後の時代に於て、舊思想、舊社會組織を復興せんとするに當つては、自から新しき或物を説かざるを得なかつた。而して其の點に於て傳統派は革命後の新しき一思想として、同時代及び其の後の佛國の思想界の發達に重大なる影響を及ぼして居るのである。要するに彼等は極端なる個人主義の當然なる結果として生ぜる、革命及び革命後の社會的擾亂并に社會的動搖を除去する爲めには、個人主義以上の一定の普

遍主義的立場から權威を確立する必要を力説し、之れによりて社會的團結を固める必要を強調せざるを得なかつたのであるが、此處に彼等の間に社會連帶思想が生れて來たのである。而して此の時代の社會哲學者や實證哲學者の社會思想は、一般に傳統派の思想の影響を直接又は間接に受けて居るので、現にサン、シモンやオーギュストなどは自から此の事を明らかに言述して居るのである。されば傳統派の社會哲學は第十九世紀に於ける佛國の社會哲學の發達上、甚だ重大なる意義を有して居るので、吾人は同派の思想を無視しては、到底満足に現代佛國社會思想の發達を理解することは出來ないのである。

尙ほ傳統派の哲學は第十九世紀に於ける佛國の思想史上、重大なる意義を有するのみならず、同世紀に於ける近代哲學の發達全體の上から見ても、亦重大なる意義を有するものである。夫れ第十九世紀に於て、第十八世紀の自然科學的世界觀に對して、歴史的世界觀が勃興し來り、而して兩者の間に烈しき論争が起つたのであるが、其の論争の最初の形態は傳統派が革命哲學に對して起せるものである。ヅ、ボナルの論ずる處によれば、個人的理性が夫れ自身によりて眞理を發見し、社會を建設し得ると考へ、又個人の共同生活の形態を任意に改變し得ると考へるのは、啓蒙哲學の根本的謬見である。實に人間の精神生活は總て歴史的傳説の一產物である。是れ人間の精神生活は總て言語に基因するが、然るに言語は神が人間に最初天啓として與へたるものであ

るからである。神の言葉は一切の真理の淵源にして、人間の智識は常に只此の真理の一分有を意味するだけである。夫れは良心から生長するので、吾人は良心に於て、普遍的に妥當するものを掴むのである。而して神の言葉の傳説を運載するものは教會にして、教會の教義は神によりて與へられたる普遍的理性である。されば只此の教會の教義、只此の天啓のみが、社會の基礎であり得るのである。教會に反逆せる個人の傲慢は、現に見るが如き社會の瓦壞に於て罰せられたので、今や人類は其の理を悟り永久的地盤の上に、新たに社會を建設せねばならぬ。

吾人は右に述べしが如き傳統派の教會的政治的思想を深く探究すると、其の中に一の重大なる哲學的要素の含蓄されて居ることを發見するので、夫れは即ち社會の歴史的發達中に實現される普遍的理性が、個人の精神的生活の基礎を成すものであると云ふ事である。吾人は傳統派の神學的服裝を取り去ると、其處にヘーゲルの客觀的精神の概念や、ディルタイの歴史的理性の概念を見出すのである (Windelband, *Lehrbuch der Geschichte der Philosophie*, s. s. 545 u. 546. 1912 參考

却說傳統派の創設者として、又其の最も重要な代表者として、認められて居るのはジョゼフ・バズ・メートン (Joseph de Maistre, 1753-1821) ヴィンセント・ベナン (Le Vicomte de Bonald, 1754-1840) 及びラメンチー (Hughes-Félicité-Robert de Lamennais, 1782-1854) である。但し若し傳統派を嚴密にカトリック教的、貴族主義的、復古主義的のものと見るに於ては、カトリック

教會から破門された後のラメンチーの思想は、傳統主義に屬しないものと認めねばならないが、併し傳統主義と云ふは、大革命後に於ける一定の哲學的方針を意味するものにして、必ずしもカトリック教的貴族主義的であることを要しないと解するに於ては、ラメンチーは其の方針を論理的に最も徹底させ、同派の哲學を總ての方面に於て大成した人と認めねばならない。ヅ、メートルやヅ、ボナルは熱烈な論客であつて、革命哲學に對する反抗心を煽り立てるに於て、大に効果を奏したが、併し思考の訓練を缺き、組織的に思索することは出来なかつたから、傳統派の根本思想を充分に展開して、哲學の體系を立てることは出来なかつた。而して之をなし遂げたるは實にラメンチーである。殊に社會哲學の上から見て甚だ興味あるは、破門後非カトリック的、民主主義的となつたラメンチーの社會哲學に於て、ヅ、メートルや、ヅ、ボナルの如きカトリック教的、貴族主義的な人々によりて唱へ出されたる社會連帶思想が、論理的に精練されて行くに如何なる歸結に到達するか、示されて居ることである。されば破門後のラメンチーは狭い意味では傳統派に屬しないとしても、社會哲學上の考察に於ては、吾人は彼の思想を傳統派の思想の論理的歸結として、當然之れに結び附けて考察せねばならないのである。

(三) ツ、メートル及びヅ、ボナルの社會哲學及び社會連帶思想

夫れ佛國の大革命は第十八世紀の個人主義、自由主義の主張を、其政治的及び經濟的方面に於

て、極端に推し進めたる結果として勃發せるものにして、而して大革命後も矢張り同一の思潮が官學説として固持された。然るに革命の結果は豫期されしが如き健實なる社會組織を齎らさず、却て社會の安定性は失なはれ、社會的動搖は止まなかつた。されば其の根本思想たる個人主義、自由主義に對して疑を挿むものゝ起るは當然であるが、此の際傳統派の人々は斷然個人主義、自由主義を排斥して現はれたる、最初の思想家であつたのである。

今傳統派の人々が「革命」の思想に對して、根本的に反抗したのは、平等及び自由の政治論よりは、寧ろ其の根柢たるルネサンス思想、宗教改革思想及びデカルト哲學の遺産であつたので、彼等の見る處によれば、其等の思想運動はつまり個人的理性の自律性を主張して、論理に於ては確實性の條件、又道德に於ては犠牲及び義務の條件、隨ふて社會的和合を可能ならしめる一切の條件を、根本的に破壊する傾向を有するものにして、而して革命及び社會的紊亂は其の當然なる結果である。個人的理性の自律性を主張し、其上に立ちて支配する普遍的理性の權威を認めない以上は、真理も道德も到底存立することが出來ず、社會は必然的に瓦壞せざるを得ないのである。而して又傳統派の人々がカトリック教に於て讃稱し、景慕せしは、其の教義よりは、寧ろ常に權威（*autorité*）を基礎とする教會の社會的組織であつたと思はれる。彼等はカトリック教會は、歴史上知られたる社會中、最も古き最も普遍的な、又最も強固に構成されたるものと考へたのであ

る。

傳統派の考へる處によれば、個性は本來人間關係の瓦壞を意味するものにして、社會的統一は本來權威によりて立てられ、權威が認められねば到底成立し得ないものである。眞の理性即ち普遍的判斷を立てる能力は、決して個人によりて表現されるものでなく、社會的合致或は集團的判斷によりて表現されるものである。要するに總て個人的なるものに對する、團體的社會的なるもの、優越と云ふのが、即ち傳統派の指導原理であつたのである。換言すれば個人的理性の上に普遍的理性を認め、而して前者は後者に服従す可きものと見るのが、即ち傳統派の根本信條であつたのである。

ヅ、メートルやヅ、ボナルは右の思想に基づきて、正義に代へるに連帶を以てし、而して箇人を倫理的及び政治的共同生活に服従させると云ふ原理を基礎として、利益の調和を圖らんとする思想運動を、佛國に於て始めて起したのである。彼等が其の直接の仕事としたのは、政治論に於て革命的個人主義と戦ふことであつたので、而して彼等は既に述べし如く、政治論に於ける革命的個人主義は宗教的及び哲學的個人主義の當然なる歸結と考へたのであるが、夫れと同時に又經濟的個人主義も其の宗教的及び哲學的個人主義より必然的に産れ出づるものなるを看過しなかつた。かくて彼等は封建的階級及び僧侶階級の利益を圖る爲めに、より多く力を盡くしたが、併し

又勞働者階級の利益を圖ることに注目したのである。要するに如何に貴族主義的であつても、社會の連帶を強調する以上は、彼等も決して勞働者階級の利益を無視することが出来なかつたのである。

ヅ、メートルは其の最初の著作の、「佛國史考」(Les Considerations sur l'histoire de la France. 1796)に於て又ヅ、ボナルも其の最初の著作の、「政治的及び宗教的權力論」(La théorie du pouvoir politique et religieuse. 1796)に於て、個人的權利の觀念を排斥し、之れに對して統一の理想(部分が全體に服従することによりて實現される)を立てることによりて、既に消極的に社會問題を提出して居たと云得られる。根本的には彼等は其等の著作に於て、只俗權は靈權に服従し、地國は天の國に服従す可きものと云ふ、オーギユスチンの説を復活せしめんとして居るに過ぎないが、併し彼等は第十七世紀の終りに於てマルブランシュがなせる如く、只人間の運命に關する神秘的及び形而上學的概念からして、彼等の政治論を演繹せんとするに止まらず、更に近世革命の歴史の考察によりて之を辯護せんと企てて居る。彼等の見る處によれば、千七百八十九年の革命は、人類をして眞正なる社會の原理を回顧させる爲めに、攝理的に與へられたる一の訓練に外ならぬ。彼等は社會的擾亂の始源及び條件の研究は、眞正なる社會の原理を證明する爲めに、一切の形而上學的推論よりも、遙かに有効するものと考へたのである。

ヅ、メートルは社會的權威を輕蔑すること、及び其の法則に背くことに伴ひ、又之を罰する政治的紊亂の考察からして、善に於ける、殊に惡に於ける人間の連帶の思想に進んだので、彼は彼の著作中最とも有名なるもの、「サン、ペテルスブルグ夜話」(Les Soirées de Saint-Petersbourg, 1831)を著したのは、右の點を闡明せんが爲めであつたのである。彼は當代の社會生活及び其の紊亂の分析は、罪あるものゝ罪過か罪なきものに、又罪なきものゝ功德が罪あるものに及ぶと云ふ基督教の教義を、明らかに證明するものと考へ、而して此の善惡に於ける連帶の事實によりて、一層深大なる一の法則、即ち統一の法則を觀破したので、要するに彼の考へる處では、惡は區別即ち特殊的存在の中に在るのである。ヅ、メートルは「サン、ペテルスブルグ夜話」の中に左の如く述べて居る。

「吾人は宇宙を吟味すればするほど、惡は吾人の説明し得ない一定の區別から生じ、又善への復歸は、均しく吾人の理解し得ない一定の統一へ、絶へず吾人を推し進める一の反對の力に依ることを、信ぜざるを得ないと思ふ。君がさほど立派に證明した此の功德の共同性、轉移性は、只吾人の理解しない此の統一からのみ生じ得るのである。吾人は一般的信仰及び人間の自然的本能を反省すると、自然が全く分離したと思はれる事物を、人間が結合せんとする此の傾向を強く感ずる。人間は例へば一國民、一都市、一團體殊に一家族を、善惡の性質を有し、善行

又は惡行をなし得る、隨ふて賞罰を受け得る、一の道德的な特異的實在物として見る、強き傾向を有するのである。

吾人の相互的一致或は統一は、神に於ける吾人の一致或は統一から生來する。マルブランシュの見神説は、聖ボーロの「吾曹は彼に於て生命運動及び實在を有する」と云ふ語の、一の勝れたる註釋に外ならぬ。ストイク派やスピノザの汎神説は、此の偉大なる觀念の一腐敗である。

時としては余は此の世の狭き限界外に飛び出でたいと思ふ。余は天啓の日に先だちて、無限者の中に余を沒したいと思ふ。人間の二重法則が消失し、人間の二中心の一がなくなる時には、人間は「一」であるであらう。假令吾人が人間を相互に他に對して考へることも、惡がなくなりて、最早情慾も亦箇人的利益も存しないであらう時には、人間はどうなるであらうか。一切の思想が慾望の如く共同のあるであらう時、一切の心意が彼等が他によりて見られる如くに自から己れを見るであらう時、「我」は如何になるであらうか。一切の住人が同一の精神によりて貫通されて、相互に貫通し、幸福を反映するであらう處の、此の天界のエルサレムを誰が心中に表現し得るか。同一の廣さを有する光の景像の無限數が、まさしく同一の場處に於て合して來ると、只無限に輝く單一なる景像が存するだけである。さはれ余は人格を觀過しない様注意する。人格がなければ靈魂不滅は無意味である。しかも余は如何に一切の宇宙が、此の神秘的統

一に吾人を導くかを見るに於て、深く感動されざるを得ないのである。

上に述べし如く、傳統派の人々が連帶及び統一の思想を強調するに於ては、彼等は自から更に進んで社會問題に觸れざるを得なかつたのである。而してヅ、メートルは個人主義的正義に反對することによりて、社會問題に對する同派の消極的方面を表示したものと認めれば、ヅ、ボナルは更に其の積極的方面を發揮したものと認め得られるのである。

却説ヅ、ボナルの社會思想は、主として彼が千七百九十六年に公にせる「政治的及び宗教的權力論」(La Théorie du pouvoir politique et religieux)及び千八百二十年に公にせる「原始的立法」

(La législation primitive)に於て論述されて居るのであるが、彼は先づ「革命」の平等觀念に反對して立てた彼の社會の概念を、説述することに力を注いで居る。彼の見る處によれば、哲學者の最初の謬見は、平等と類似とを混同することである、如何なる點に於ても類似しないものは、社會を形成することが出来ないであらう。併し能力及び力フアキュルトに於て平等なるものは、結合しても直に分離する。つまり彼等は只分離する爲めに結合するだけである。神と人間、又人間同士、即ち意欲及び行動は類似して居るか、しかも平等でない處の實在物は、總て只此の類似と不平等との事實によりてのみ、社會と稱せられる意欲及び行動の一體系、一の必然的秩序に於て結合されるのである。吾人若し總ての實在物に於て、意欲及び行動が平等であると想像するならば、社會は存立しない

であらう。其の場合には總てが強くなるか、又は總てが弱くなるであらう。併し社會は只強者と弱者との關係に外ならないのである。

ヅ、ボナルは右の如くに、能力と力との不平等の結合として見たる社會の概念からして、箇人の一切の道德的本分を演繹せんとして居る。彼の考へる處によれば、社會に奉仕することが、即ち義務の遂行であると云ふ意味に於て、道德は全然社會的なものにして、又只社會的なものであり得るのみである。啻に人間が社會を作る可きもので有るだけでなく、又社會は人間を作る可きもの、詳しく云へば社會的教育によりて人間を形成す可きものである、人間は只社會の爲めにのみ存在し、又社會は只社會の爲めにのみ人間を形成する。されば人間は彼が自然より受けた總てのもの、及び社會より受けた總てのもの、つまり人間である總てのもの、及び人間が有する總てのものを、只社會の奉仕にのみ使用す可きである。

傳統派は恐らくは、社會が人間を構成すると云ふ思想を明言した、最初の學派（少なくとも佛國に於ては）であると思はれる。而してヅ、ボナルが更に右の思想を、認識の本有性の批判によりて基礎附けて居ることは、注意す可きである。彼の論ずる處によれば、吾人の觀念である處の道德的真理の知識が、本有的であると云ふは、是れ箇人に就て云ふ可きでなく、社會に就て云ふ可きである。即ち道德的真理の知識は箇人に於て本有的であるのでなく、社會に於て本有的である

のである。而して夫れは道德的眞理の知識は、總ての箇人に於て存在するのでないが、之れに反して總ての社會に於て大なり小なり存在せざるを得ない（蓋し何等かの道德的眞理の知識なくば、社會の如何なる形體も成立し得ないからである）と云ふ意味に於てである。

併し、ボナルの論する處によれば、假令箇人は其の形成の理由によりて、本來社會に奉仕す可きものであるとするも、夫れが爲めに箇人の道德的本分は報酬なき犠牲を、箇人に課すると云ふ結論を生ずるのでない。社會的狀態は、完全なる發達に到着せる家族の狀態に外ならぬ。されば家族の連帶性は其の總ての度合に於て、社會に於て存在せねばならないのである。是れ經濟學者が第十八世紀哲學の唯物主義的原理に忠實なることによりて、故意に看過せる點である。近世國家に於ては、事物の管理は人間の管理を壓して完成され、而して人々は精神的なるものよりも遙かに多く、物質的なるものに力を注いで居る。人々は殊に器械を發明することを重要視し、而して一國家に於て人間の産業を助ける爲めの器械が増加すればするほど、單に器械に過ぎない人間が益々増加すると云ふ事に注意して居ない。アダム、スミス自身がそうである。彼の著作は實に此の物質的及び唯物主義的學說の聖書である。」

勞働者が益々器械に支配されること、及び階級間に連帶の缺けることからして、經濟的均衡が破れて來た。是れ窮民が必然的に増加し、社會を危險なる狀態に陥れるからである。「近世政府は工場、奢侈、享樂殊に人口の益々増加せんことを欲し、而して貧困を根絶せんと求める。夫れは

つまり原因を望みて、結果を避けんとする事である。巨大なる富豪の最も多く存在する歐洲の諸國は、又貧民の最も多く存在する國である。世人は此の點に考を及ぼして居ない。今や歐洲に於ける社會は紊亂崩壞の一状態にあるのである。」

されば社會的原理への復歸は、精神的方面に於ける如く、又物質的方面に於ても、連帶の政策を實行することを要する。「國家は經濟的な事柄に於て、一定の任務及び義務を有し、若し之を怠れば總ての秩序は傷害されるのである。」「政府は常に公人の指揮に當るのみならず、尙ほ又公物の管理にも當らねばならぬ。見捨てられたる總ての物、何れの家族にも屬せず、財産を有せず、又少なくとも正當な勞働によりて財産を獲得する手段或は意志を有せずして、見捨てられたる總ての人々は總ての家族に屬する、或は人間の爲めに圖り、公益の爲めに物を利用する國家に屬する。」

「此くて捨兒、乞食、浮浪人及び無賴漢、并に一般に家族を有せず、或は他人の家族に迷惑をかける總ての人々は、國家の大家族に屬し、而して彼等が訓練、教育、勞働及び生活資料を與へられる救濟所或は感化院に、一時或は終生收容されねばならぬ。」

「國家は弱き人々、見捨てられたる人々に對して、父の義務を盡くすことによりて、又其等の人々に對して權力を獲得し、彼等をして彼等の力、及び彼等の能量に應じて、國家の必要に奉仕させることが出来る。」

「國家は總ての市民に於ても、男女夫婦れに適當なる生業の發達、及び各人が依て以て其の

業務に従ふを得る處の、又總ての家族が依て以て或財産を獲得し得る處の、一切の自然的及び獲得的手段の使用を可能ならしめ、且つ助長するであらう。而して夫れが爲めに國家は學校、警察所、美術館、水陸の交通機關等を建設するであらう。國家は人々の生命の安全、住所の衛生、生活資料の富豊なることに注意し、努力するであらう。要するに國家は其の任務を遂行する爲めに、人々の娛樂に對しては少しく、彼等の必要に對しては十分に、而して彼等の徳の爲めには總てを成し遂げるであらう。」

以上述べ來りし處によりて見れば、傳統派は既に其の創設者たるヅ、メートルヤヅ、ボナルに於ても、完全なる社會的及び政治的復興の條件を規定する爲めには、道德的秩序の名に於て、窮民問題を提出し、利益の自然的調和の原理を排して、組織されたる社會連帶を樹立せねばならなかつたのである。つまり彼等は社會問題に觸れることなしには、社會的及び政治的復興を考へ得なかつたのである。されば彼等の復古主義は單純なる復古主義ではなく、社會的改造の意義を包含する復古主義であつたと云ふ事が出来る。彼等は復古によりて社會連帶を確立し、以て勞働問題をも解決せんとしたのである。彼等は勞働者階級が假令資本家の掠奪に放任されなくとも、少なくとも自由競争に放任されて居る社會は、紊亂崩壞の状態にあることを宣言し、國家は人の爲めに圖り、公益の爲めに物を利用す可きものなるを要求したのである。併し彼等は根本的な解決は、只社會が嚴密なる道德的、知力的及び宗教的統一に導き歸へされる時にのみ、只世俗的權威が心

靈的權威と同様に位階的に組織せられ、且つ遵奉される時にのみ、只箇人の社會的本分が全然其の道德的本分である時にのみ、到達されるものなるを強調したのである。而して其等の思想は如何に含蓄する處大なるやは、少しく注意して考察すれば、直ちに觀破されるので、之をツ、メートルやヅ、ボナルに於て見るが如き、法王主義及び君主主義の混合から淨化して、其の含蓄内容を近代的に發展させることが、次の思想家の任務であつた。而してコントの社會學或は社會哲學も、つまりは其の近代的發展の一種と見做し得られるのであるが、コントと同じ頃に、廣義にては傳統派の一大哲學者と見做されて居るラメンチーも亦之を企だてゝ居た。ラメンチーは傳統派の根本原理を承認して居るが、或は其の創設者の一人であるが、併し遂にはカトリック教の教義や貴族主義に拘束されなくなつことによりて、其の根本原理を最も徹底的に展開させ、ヅ、メートルやヅボナルとは異りて、社會的民主主義に進んだ。彼は傳統主義から社會主義へ橋を架けた人、或は佛國社會主義の重要な一先覺者と認めらる可きである。

京都帝國大學の圖書館及び研究室には、ツ、メートルの著作はかなり所藏されて居るが、ヅ、ボナルの著作は一冊も所藏されて居ない。又、ツメートルの著作中でも、彼の社會哲學を研究する爲めに重要な或ものは所藏されて居ない。それで本節に於て説述する處は、傳統派の哲學を論究する諸書を參考し、殊にフエラズ氏及びリシャル氏の著書によりて書いたのである。尙ほ次の(四)に於てラメンチーの社會哲學を論述するに當つても、矢張り右の諸書に據つたのである。是れラメンチーの著作中哲學上重要なものは大學に所藏されて居るが、特に彼の社會哲學を研究するに必要なものは「信者の言葉」の外は、所藏されて居ないからである。(未完)